

教員…その足跡を辿る

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-10-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山下, 忠五郎 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/7733

教員…その足跡を辿る

山下 忠五郎

はじめに

「山下先生はいつからいい先生になったんですか...?」教職大学院にお世話になるようになってしばらくした頃に言われたことである。

「いい先生...? う～ん、いい先生やったかな...」って答えたように記憶している。

どうしてこのような会話が成立したのだろう?その人は、私がある時期まで「いい先生ではなかった」という情報をどこかで手に入れていたのであろう。

いつからいい先生になったのだろう...。いや、いい先生になんてなっていないのでは...

この「ある時期」「いつから」が見えてくることを期待しながら自身の教員生活を振り返ってみたい。

私が教員になったのは昭和 47 年 4 月である。給与改定が毎年行われ、4 月に溯って実施される年末の差額は給与を超えて支給された。また、人確法が成立し(昭和 49 年)教員の給与が平均 9 %アップするなど古き良き(?)時代であった。そして、昭和 47 年は、第 3 次改訂の学習指導要領が実施された年でもあった。

平成 20 年 3 月 31 日、定年退職。小学校勤務 9 年間、中学校勤務 20 年間、行政で 8 年間と 37 年間の教員生活(正確には 29 年間)であった。すべてが新鮮だった 20～30 代、保護者や地域を強く意識しはじめた 40 代～50 代前半、これからの中学校の有り様を追いかけた 50 代後半に分けて振り返ってみたい。

1. すべてが新鮮だった 20 代～30 代

(1) 教員としてのイロハを学ぶ(昭和 47～49 年度)

「あした、いしな拾いするぞ...」と言うと「せんせい、なにひろうん...」と戸惑う生徒。そして、「おっちゃん」「きょうとい」がわからない私。同じ福井県なのに言葉が通じない。嶺南の小京都での教員生活はこんな具合に始まった。

若狭という風土、学校という組織...それまでの経験ではいかんともしがたい世界に飛び込んでしまったと言っても過言ではない程のカルチャーショックだった。とにかく早く学校を知り、生徒を知り、地域になじむことが求められた。

赴任すると同時に一人前の教師として扱われた。ベテラン・中堅の先輩と同じように、学級担任を任せられ、校務分掌も与えられ、部活動の顧問も持たされた。「若いんだから、生徒に一番近いんだから思いっきりやればいいんだ...」とよく言われた。しかし、「先生は教える人」「学校は勉強するところ」程度の認識しかなかったので、思いっきりやろうにもどうしていいのかわからず戸惑いの連続であった。

1) 先輩に支えられ教員としての基礎を学んだ 1 年目

ありがたかったことは、うるさがられるほど頻回に尋ねることに丁寧に応えてもらえたこと。また、指導やアドバイスは「こするとどうやる...」とか「こうしてみたら...」と具体的だったことである。

3 年間学年主任として大変お世話になった Y 先生には、いつも何かとアドバイスをいただいたが、なかでも保護者会の持ち方、通知票の書き方、調査書の書き方などは新米の私には本当に有り難かった。永年の先生の経験と実績に基づいた具体例を挙げてのアドバイ

スは教員としての在りようを示唆するものでもあった。

授業づくりは、先輩の授業をまねすることから始めた。保健体育という教科の特性上、常に先輩とペアで授業をするので盗みやすかった。目の前で展開されている生の授業を通して直接指導を受けることができたのである。新学期の最初の単元は陸上、W-up から主運動へつなぐ動きづくり、補強運動、指導内容など1時間、1時間が教材研究であった。

当時の体育学習は、効率よく技能を習得し高めること、体力を高めるために運動量を確保することが授業づくりのポイントだった。教材研究も、効率的に技能を高めるための指導技術や運動量確保のためにどのような運動を取り入れるかが中心課題だった。

1年目から授業で心がけたことは、できる限り生徒と一緒に動くようにしたことである。生徒と一緒に動き(運動)を体験しながら授業づくりを学ぼうと考えたのである。そして、一緒に動くことや示範することで生徒の学習意欲が高まることを期待したのである。

今も中学校では、4月の終わりから5月の始めにかけて「開校記念マラソン大会」が行われている。授業もこの大会をめざして長距離走の学習が行われる。1週間前頃から大会コースの試走が始まる。1日3～4時間、毎時間、最後尾から生徒を励ましながら走ったものである。管理職になってからも、マラソン大会では最後尾から生徒達を元気づけながら走ってきた。

「生徒と一緒に…」は、常に意識しながら最後までそうあり続けたいというのが私の願いだった。

保健体育の教員は4名、全員男性、まとまりがよく、全校的な行事をはじめ学校全体としての取組の先頭に立って指導にあたるが多かった。

体育主任のM先生は強烈な個性の持ち主で周りのみんなをぐいぐいと引っ張っていくパワフルな先輩だった。授業のことも学級のことも部活動のことも生徒指導のことも…あらゆる面で最も影響を受けた先輩であった。生徒からの信望が厚く、自信に溢れた言動、実行力などは魅力的だった。I先生、W先生は経験豊富で度量の広い方で、授業づくりや部活動指導から私生活面までサポートしてもらった。

また、当時の学校はたいがいそうであったように、O中学校は、職員厚生が充実していた。なかでも、学校行事が終わったときや学期末などに反省会と称して行われる全職員での懇親会は、学年、教科を越えた先輩とのフランクな会話がはずみ、お互いに理解も深まり、次の日からの意欲や活力をもらう場でもあった。

その間を縫って、教科や学年単位での懇親会、旅行、レクレーション等が行われた。こういった機会もまた教員としてのイロハを学ぶ貴重な時間であった。近年、こういった機会が少なくなっているのはとても残念なことである。

わからないことは1から10まで先輩のアドバイスを仰ぎ、先輩の真似をすることから始まった1年目。真似ているうちに学校の全体像がおぼろげにも見え始め、教員としての在りようもわかってきた。

わからないこと、疑問、不安に思っていることなどは遠慮しないで先輩に聞くこと、どんな些細なことでも遠慮しないでとにかく教えを請うことは新任教員の仕事である。先輩に教えてもらうこと、先輩のマネをしながら習うことをためらうことなかれ。

今学校に必要なことは、教員同士がフランクに語り合う機会をたくさんセッティングすることであろう。仲間の声に耳を傾け、自らの思いの丈を語る、できれば杯などを傾け、美味しいものに舌鼓を打ちながら…。

2) 今はない実際にあったこと

a. ガリ版、鉄筆、蠟原紙

当時、印刷物はガリ版、鉄筆、蠟原紙、謄写版又は手動の輪転機でつくられた。ヤスリが木の板にはめ込

まれたガリ版と呼ばれる板の上に^{ろうげんし}蠟原紙を置き、^{てっぴつ}鉄筆とよばれる先のとがった金属で蠟原紙をなぞって字を書き、その蠟原紙を謄写版に設置し、インクのついたローラーを転がして印刷物ができあがるのである。

この印刷物づくりで最もやっかいなのは、鉄筆で蠟原紙に字を書く行程だった。圧力のかけ方や動かした方がまずいと蠟原紙が破れてしまうのである。鉄筆の押さえ加減とマス目にあわせた四角い字を書く技術を身につけなければならなかったのだ。失敗を繰り返しながら技術の習得に専念したものである。この技術は、当時の教員には必須であった。学校行事の実施要項、保護者へのおたより、プリントやテスト問題の作成など文書作成は全て「ガリ版刷り(=手づくり)」だったのだ。

この技術は、事務職のK氏、体育科のW氏が私の師匠だった。直接手ほどきを受けるというより、見よう見まねで覚えたものである。そのうち、ボールペン原紙、電動の輪転機などが現れ「ガリ版刷り」は、間もなく姿を消すわけであるが、文字の大きさ、形を整えて書くという技術を体得できたことは、私にとって

貴重な財産であった。今ではパソコンで文書が作られるが、当時はまだまだ書くことが主流の時代だったのである。

しかし、新採用の年から5年後には「ガリ版刷り」は姿を消したと記憶している。

b. 学級ハイキング

学級が集団として機能するには集団を構成しているメンバーが良好な人間関係であることが大切である。なかでも、子どもたちの文化にカルチャーショックを受けた私との関係づくりがポイントであると考えていた。学校という緊張感のある環境とは違った環境でコミュニケーションの機会を持とうというわけである。

クラスのレクレーションを兼ねて、担任をふる里の自然や名所を案内するという企画である。行き先や日程等は子どもたちが中心となって計画した。公園で遊ぶ、山登り、名所を訪ねる、祭りに行く、魚釣りを楽しむなどであった。子どもたちの間で流行っている遊びを一緒に楽しんだり、私はフォークダンスを教えたりして楽しんだものである。寮生活だった私のために、子どもたちが交代でおにぎりを握ってきてくれたことはとても有り難かった。

実施要項を配布することもなく、親御さんの了解をとるでもなく、学校にも届けず、保険もかけず、今ではとうてい実施は不可能である。当時は、そんな手続きの必要性など知らなかったのだ。教員としては不適切な行いであったかも知れないが、生徒と私、生徒相互の関係は深化し学級のまとまりにもつながったのである。

c. 宿直

私の新採用時には「宿直」という制度(?)があった。男性教員が交代で学校に泊まって夜間の学校管理に当たった。まだセキュリティシステムもなく、警備会社もなく、教員自らが警備していたのである。生徒が下校し、教職員が帰宅した後、一人で校舎内を回り施錠を確認する。広い校内には宿直の教員と住み込みの用務員が居るだけという状況で夜間の管理が行われていた。ある意味、平和な時代だったのである。

この宿直は、他学年や他教科の先輩と話す貴重な時間だった。地域のことや生徒のこと、学校のこと、生徒指導や学級経営のこと、飲み屋のこと等々...雑学の時間であり情報収集の時間であった。

その日は、2学年主任のK教諭が宿直であった。職

員室の真ん中で何やら印刷をしていたので、紙送りを手伝いながらお聞きすると、印刷物の正体は「学年だより」だった。週予定、学校・学年行事、学習状況、生活指導等について定期的に生徒・保護者に知らせるのだという。学年主任が「学年だより」なら、学級担任は「学級だより」だと思い、自分も「学級だより」を出すことにしたのである。

このように、宿直は先輩方とのつながりを深める場であり、新米教員を一人前に近づけてくれる場だった。

また、土曜日の夜などは、部活や学級の生徒達が訪ねてくることもあった。体育館でバスケットボールをしたり、目の前の河口で魚釣りをしたりした。学年を越えた生徒達とのつながりも演出してくれた。

今はもう化石になってしまった「宿直」ではあるが人を育てる貴重な場だったのである。

d. 保健体育授業時数週3.5時間と第3体育

「健康で安全な生活を営むのに必要な習慣や態度を養い、心身の調和的発達を図るため、体育に関する指導については、学校の教育活動全体を通じて適切に行うものとする。特に、体力の向上については、保健体育課の時間はもちろん、特別活動においても、じゅうぶん指導するように配慮しなければならない。」(昭和47年4月実施 第3次改訂学習指導要領 総則第3)

この第3次改訂では、保健体育の授業時数は週3.5時間となったことと、体力の向上が強く求められたことが特徴であった。

体力向上については、各学校の実状に応じて取り組まれた。小学校では、校時に「大休み」という時間を設け、一定時間駆けっこをした後自由遊びをするなどして体力の向上に努めたのである。

私の勤務したO中学校では、清掃と帰りの会の間に「全校体育」という時間を設け、敷地内にコースを設定し5分間走を行った。モチベーションを維持するために、走った距離を記録し、県内一周とか全国一周を目指すなどの工夫もしながらの実践であった。また、月に1回学年マラソンを実施し、全校体育の成果を確認した。生徒も教員もみんなが走る、まさしく全校体育であった。

3) 特別活動は教員としての成長に欠かせない

a. 学校行事

入学式から卒業式、その間に様々な学校行事が行われる。陸上記録会、開校記念マラソン大会、写生大会、

修学旅行(3泊4日)、球技大会(1学期-バレーボール、2学期-サッカー(男)、ハンドボール(女)、3学期-バスケットボール)、合唱コンクール、春・秋の遠足、水泳大会、学校祭(前日祭・体育祭・文化祭)、全校体育&学年体育、夏休み中の陸上合宿(県大会に向けた選抜選手の強化練習)、予餞会、卒業式等々……当時の学校行事である。(さらに、地区・県中体連主催の春・夏季大会、北信越大会、全国大会などが入ってくる)

今では、多忙化解消、授業時間確保などの理由から半数近くになっているのではないだろうか。教室は苦手だが教室外の活動には瞳を輝かす子だっている。学校行事は子どもたちの瞳を輝かせる時であり場なのである。そんな時と場がある学校が楽しい学校なのだ。そんな学校はもう戻ってこないのかも、寂しい限りである。

学校行事は学校生活にメリハリをつけるものであり、学級づくりの重要なファクターとなる。中でも、学級対抗で行われる行事は学級が一つになっておおいに盛り上がる。勝っても負けても次の大会こそは…とさらにまとまりを強くしていくのである。球技大会などでは、学級担任がベンチ最前列に座り、作戦タイムを取り指示を出し、声をからして声援する。そうして学級担任と子どもたちの気持ちが一つになっていったのであった。

一方で、体育的行事には保健体育科の教員が生徒会の顧問として参画する。特に、教員の役割分担や日程調整、対外的な届出など学校全体を動かさなければならぬ。教務主任、学年主任、生徒会担当、体育主任などと調整して実施要項(案)を作り職員会議に提出し、承認を受けなければならないのである。保健体育科の教員は、他の教科に比べ学校全体に関わる役割を担う機会が多かった。早いうちからそういった経験の機会があったお陰で教員生活に早く慣れることができたと思っている。

「仕事は買っても…」と言われるが、特に若いうちは率先して様々な経験をさせてもらうことが肝要である。実践なくして成長はあり得ないのである。

b. 部活動

新任校も、部活動は非常に盛んで、地区内ではいわゆる強豪校だった。卓球部や柔道部、水泳部、陸上部などは県内でも強豪校で全国大会に出場するほどの実績を誇る学校であった。そんな中で、1年目はサッカー

一部、2・3年目は女子バレー部の顧問を任された。

この部活動指導では、生徒との人間関係づくりで苦労をした。原因の一つは、「こうあるべき」という私の勝手な価値観を生徒に押しつけてしまったこと。もう一つは、自らの指導力不足を省みず、生徒に敗因を押しつけてしまったことである。未熟な者が勝負にこだわるあまり招いた結果は明らかで、生徒との関係がぎくしゃくしてしまい、部活動の楽しさを生徒達から奪ってしまったのである。

そこで、2年目からは部活動日誌を書くことにした。お互いの思いを遠慮しないで書き合う、部員との交換日記のようなものだ。なぜこんな練習をするのか、もっとこうしてほしいとか、なぜこのフォーメーションをとるのか、弱点とその対応策などその時々を思いを伝え合うことにしたのである。部活動日誌を通して信頼関係を築き、チーム力の向上につなげようとしたのだ。卒業後、バレー部の同窓会に呼ばれるといつても話題になることのひとつがこの部活動日誌である。

＜先生へ＞ 先生はこのごろ、何か私たちに気に入らないことがあるのですか？なぜならば、部の時間、すごく不きげんな顔をして、アタックが決まっても少しもうなずいたり、喜んでくれたりしてくれないんです。今までどおり、大きな声で注意して下さい。みんな「このごろ先生おかしいなあ」と心配しています。わたしたちはぜったい負けまい！とがんばっているんです。わたしたちはぜったい目標を達成します。絶対、先生についていきます。ですから、今までどおり、わたしたちを見守っていてほしいのです。何か、わたしたちに、言いたいことがあるのなら、何でも言ってください。

これは、40年ぶりに開いた部活動日誌から出てきた、当時、キャプテンだったNからのメッセージである。未熟な自分がいて恥ずかしい限りであるが、こういった経験を重ねながら自分は孵化し脱皮していったのであろう。

4) 余談1：小学校普通免許取得という条件付き助教諭採用

辞令交付式でもらった辞令は、小学校勤務を命じていた。新聞紙上でも小学校新採用欄に名前があった。自分と隣り合わせの地域へ赴任する大学の同期と早速電車で飛び乗った。彼も私と同じ助教諭採用だったと

記憶している。辞令で命ぜられた小学校に挨拶に伺うと兼務辞令が待っていた。これを持って、すぐ近くの中学校へ行きなさいというのだ。正式な所属（籍）は小学校で実際の勤務は中学校、だから勤務状況、給与などは小学校で処理するというのだ。給与は支給日に取りに来なさいと言われたことだけ記憶に留め、小学校にはいささか不安を感じていたので、気持ち的には少し楽になって中学校へと向かった。

兼務辞令を持って教頭先生に挨拶、校長室に案内され校長先生に挨拶、次は事務室で事務職員に挨拶、職員室へ戻ると各学年に挨拶をして挨拶終了。年度末・年度はじめの日程表が渡され、以後の動静などについてレクチャーを受け、社会人になったことを実感しながら家路についた。

ところが、その後、長く小学校普通免許取得で苦労することになるのである。進捗状況の問い合わせがあるともらしい理由をつけて先延ばししていた。また、資格試験で合格すれば一発で取得できると聞き、東京まで出かけて受験したが勉強をしていないので合格するはずがなく順当に不合格。新任校の3年間では免許を取得することができなかった。

4年目、福井市内の小規模小学校に異動。無免許運転である。さすがにこれはまずいと思い、異動と同時に通信教育を始めた。レポートと夏季休業中のスクーリングをクリアし、年度末には無免許運転を解消することができた。

しかし、助教諭という自分の置かれている状況に不満を持っていた。一つは、採用試験の要項には、小学校普通免許を持たない者は助教諭採用という条件は記載されていなかったこと。二つには、小学校普通免許を持たない者全員が助教諭採用ではなかったこと。そして、採用する側には説明責任があるにもかかわらず説明がなかったことからである。でも、あの時取得しておいてよかったのである。15年後、小学校への異動を希望したが、小学校普通免許がなければ叶わなかったのだ。しかも、その5年間の小学校勤務がその後の学校づくりを大きく左右することになったのである。このことについては、後節で詳しく述べたい。

その時は不満や疑問を持ち嫌々ながらやったことでもどこかで生きることがあるのだ。やってみないと何も生まれないのであって、とにかくやってみることが大切なのである。

（２） 地域的な特性を打ち破ろうとスポーツ活動に

取り組む（昭和50～51年度）

昭和50年3月下旬、明日からのバレーボール部の合宿準備をしている最中、突然校長から異動の内示を受けた。福井市内の小学校だという。福井市（管外）へ異動する場合、3月初めには引っ越しの準備を始める先輩を見てきたので大変驚いた。新年度に向けた授業計画などの準備も始まっている段階での異動命令は腹立たしいものであった。すでに許可を得ていたバレー部の合宿（2泊3日、三方青年の家）だけはさせてもらい、後ろ髪を引かれる思いの中、2つめの学校へと向かった。

赴任先は福井市の南西、丹生郡清水町（現福井市）と境界を接する地域の小・中併設の福井市A小学校だった。学年7クラスから学年1クラス、学年会から小学校部会、幼稚園から中学校まで同じ顔ぶれ、市街地から農村部、学校のシステムも雰囲気も...、何から何までがらりと一変してしまったのである。3年間の経験は中学校であり、小学校は教育実習の経験もなく、2回目の新採用教員の心境であった。また一からのスタートのようなものであったが、ここでも先輩に支えてもらった。小学校のH教頭は特別支援教育に長く携わってこられた方だったので発達障害児の指導、教務主任のW教諭には校務全般、N教諭は地元の方だったので地域のこと、T教諭には体育的行事に関することでお世話になった。ただ、小・中の違いはあれど3年間の経験で若干の気持ちのゆとりはあった。

1) スポーツ大会への出場で子どもたちの意識を変える...自信をもたせる、視野を広げる

福井市の南西の端に位置し、幼稚園から中学3年まで交友関係が固定、刺激が少ない環境で義務教育を終えるのである。特に、交流の範囲・人が限られていることは、子どもたちにはマイナス要素である。子どもは、幼稚園から小学校へ、小学校から中学校へという節目毎に、新たな出会いや交流の範囲が広がる中で成長していくのである。こういったチャンスがないので、意図的に地域以外の子どもたちと交流する機会を設けてやらなければならないという考えに至ったのである。

保健体育の教員、前任校では部活動指導の経験もあったのでスポーツを通してできることはないか...。運動技能を伸ばし大会に出場すれば同世代の子どもたちと交流することができる。また、地域以外の場所で活躍するチャンスを与えることで、向上心や競争意識の

高揚にもつなげなかったのである。福井市の小学校連合体育大会(陸上競技)や器械運動発表会(鉄棒、跳び箱、マット運動)県陸協主催の学童記録会に積極的に参加した。これらの大会は、市内・県内の5・6年生が参加する大会、学校をアピールするには絶好の機会だったので最も力を入れて指導をした。

さらに、放課後や夏・冬休みにはバレーボール、バスケットボールの練習をしていたので各大会に出場した。練習や大会出場という体験を通して自信持つこと、そして、学級集団の質の向上をめざした。幸いにも、連体での活躍、器械運動での高評価、県少年少女バレーボール大会6人制男子優勝、県ミニバスケットボール大会準優勝などの好結果を残すことができ、「僕らにもできる」という自信につながった。学級集団としてのまとめ、学習意欲の高まりなどとして変容が見られるようになっていった。

また、小中併設校だったことから中学生の連体の指導にも関わった。3年生の女子に将来楽しみな子がいたので、中学校の先生や保護者の了解を取り、通信陸上や県中学校陸上競技大会に出場させた。決勝には残ったが上位入賞にまでは届かなかった。ところが、さる高校陸上部の顧問が彼女の将来性に目をつけた。彼女は、その誘いを受け入れ進学、1年目から実力を発揮しはじめ高校陸上界のエースとして活躍した。

「挑戦意欲を刺激し、自らの実践を通して「できる」を実感させ、自信を持って更なる成長に向かっていく」ことを期待した取組であった。ある程度の成果がみられたのは、自分の得意分野で仕掛けたことがポイントだったと思っている。

1年目の連体練習の頃には「今度来た先生は、うらんとこの孫は足が痛いというのに休ませもせんと練習させているという...」という声も聞かれたが、子どもたちが一生懸命練習し大会で結果を出すのに比例して、そういった声は聞かれなくなっていった。保護者、地域の方々に信頼の輪が広がっていったのだと思ったものである。

保護者・地域に信頼されなる教育活動こそが学校経営の1丁目1番地であろう。この信頼度を高める教育活動を展開することこそが学校の使命なのである。このあと、さらに教育への関心が高じてくるに比例して痛感するのであるが、特に、学校改革の真っ直中で管理職(校長)として学校を運営する立場に至って「信頼度を高める教育活動」の必要性をあらためて強く意識することになるのである。

2) 古き良き風習に会う - ふる里の祭 体育祭 -

地区民総出の体育祭はふる里の祭、祭の締めくくりは「打ち上げ」、体育館一杯に長机をならべ大宴会が始まる。手作りの料理にお酒が振る舞われおおいに盛り上がるのである。

地域の絆を確かめ、深める絶好の機会であったのであろう。我々教員もそこに参加させてもらえたのである。地域の一員になったような錯覚を覚えるほどに歓談したことを覚えている。直接お会いし、言葉を交わすことで、自分自身を知ってもらい、一方では、保護者の方々や地域の方々を知り、地域を理解することができるのである。

近年、こういった地域の風習がなくなっていることはとても残念である。私の教員生活では1回限りの経験であった。

3) 余談2: ノルディックスキーとの出会い

私は、学生時代、スキー部に所属しノルディックスキー(距離競技)に挑戦していた。小学生の頃、土手や山を竹スキーで真っ直ぐ滑り降りた経験しかない者がスキー部に入ったのだ。中学、高校とバレーボール部だったので、入学と同時にバレーボール部の門を叩いた。ところが、ネットの高さ(2m43cm)と身長(1m72cm)の差、わが家の農繁期と大会日程の重複という2つの問題が判明。特に、後者が問題であった。わが家は、父は会社員、母は専業主婦で8反ほどの田圃を耕す兼業農家だった。今では考えられないことであるが、このお米が私の学費をまかなっていたのだ。だから、春と秋の農繁期の手伝いをキャンセルすることはできなかった。この農繁期と大会日程が重なりから冬季のスポーツということになり、スキー部の門を叩くことになったのである。(実は、スケートをやりたかったのだが、金澤大学にはスケート部がなかったのだ。)

なぜノルディックスキー...? 「スキーもウエアーも部で準備するから入りまっし」と、初めて部室へ顔を出したときの先輩の言葉がノルディックスキーの始まりだった。その年、新入部員はアルペンの2人だけ、そこへ私が顔を出したのでいいカモだったのだ。こんな具合にしてノルディックスキーと出会い、その後14~5年ほどのつき合いとなるのである。

教員生活2年目から、再び競技スキーに挑戦しはじめた。県内大会や地域大会(中部日本大会)への出場を重ね、昭和50年の大山国体(富山県)、昭和51年

の大鰐国体（青森県）と2度の国体も経験することができた。

そういった関係から、福井県スキー連盟ジュニア強化指定選手（ノルディック種目）北信越合宿の監督を引き受けていた。明日の出発に備え準備をしている最中に校長から電話がはいり、再び突然の内示を受けたのである。

（3）部活動、中学校体育連盟との関わりから学ぶ（昭和52～60年度）

5年、6年と持ち上がり卒業式も終え、2回目の新採用2年間の経験を生かした実践をと意気込んでいた矢先であった。またもや何の前触れもなく異動の内示があったのである。異動を希望していないのに、再び2年と短期間での異動となった。

学年1クラスの小さな小学校から、学年10クラスのマンモス中学校へ異動。しかも、俗にいうところの伝統校。「年度はじめの職員会議に提案・承認されましたか...？年度途中の提案は認めない」という『しきたり』にビックリ。教員6年目にして無担任、5年間の学級担任経験があっても1年目は副担任だった。これも伝統校の洗礼か...？悔しかったことを覚えている。

だが、先生方は経験も個性も豊かで、多彩な顔ぶれだった。学習指導や生徒指導、学級経営、部活動指導などは勿論であるが、それ以上に、人付き合いの仕方や勤務時間外の過ごし方といった生き方を学ぶことができた。いまだ未熟だった私には恵まれた環境だった。

また、M中学校には、良識がありクレバーで実行力を備えた生徒が多かった。学級づくりや学習活動、生徒指導などで特別な苦勞を強いられることはなかった。

さて、当時の中学校では、生徒指導、部活動、受験が学校評価の観点であった。生徒指導上の問題がなく学校が落ち着いていて、部活動の成績がよくて、進学校といわれる高等学校への入学者数が多い学校を「良い学校」と評価したのである。このことは過去形ではなく現在進行形であるが...

受験指導が大きく変わった時期でもあった。朝の会、帰りの会は「プリント学習」で始まるようになったのである。そして、宿題にも各教科のプリントが毎日出される。馬に飼料を食わせるようにプリントを与える「プリント学習」が始まった。こうして受験指導がどんどんエスカレートしていったのである。そうした中、昭和55年に「学校群制度」が導入され、さら

に、私立高校入試で県立高校との「併願」が可能になるという新たな入試のかたちもできあがっていくのである。

M中学校は、9年間という長期滞在となったが、部活動と中学校体育連盟の関わりが、特に印象深く思い出される。

1）部活動

陸上競技部を担当した。新任校ではライバル校であった学校で、毎年全国大会に出場するなど競技力の高い伝統校であった。陸上競技の経験も、陸上部指導の経験もなくとまどっている上に、輝かしい伝統を守らなければという焦りが重なり1・2年目はやや不本意な部の経営になったしまった。2・3年生部員とのコミュニケーションづくりに失敗し、生徒達には苦い思いをさせてしまったのである。今でも申し訳なく思っている。新任校での学習が生かされず同じ失敗を繰り返してしまったのである。

3年目あたりから、先輩や他校の顧問のアドバイスなどに支えられながら徐々に部活動指導に自信が持てるようになっていった。この頃から、「一人ひとり能力に違いのある生徒達みんなに陸上部に入って良かったという思いを持って卒業してほしい」という願いが届く指導を心がけた。結果を追いかけるのではなく、一人ひとりの成長に目を向けられるようになったのである。

一方、優れた能力を持つ生徒達には県や地域レベルの大会、さらには全国大会での活躍を期待もして指導にあたった。北陸三県大会、北信越大会、全国大会、ジュニアオリンピックなどの出場権を獲得した生徒のお陰で貴重な経験もさせてもらった。

一人ひとりの成長を大切に部活動指導は人づくりであり、生涯記憶に残る思い出づくりの場なのだと思うようになったのである。

山下先生、お正月を迎える度に、〇〇中学校陸上部時代の元旦マラソンを思い出します。部活という名目で大手を振って夜中にわくわくしながら外出したのを覚えています。古き良き時代でしたね。いい思い出をありがとうございました。

これは、今年の元旦に届いたあるOGからの年賀状である。

部活動の思い出は当時の立ち位置で異なろうが、価

値はこういったいつまでも記憶に残る思い出づくりなのだと思う。自分自身も、敦賀市で開催されたインターハイ予選で2日目に残り宿泊することになったことが思い出される。仲間や顧問の先生と背中を流しあった光景である。勿論、競技と直結した思い出もあるだろうが、仲間と体験した非日常的な活動の方が年を重ねるほどに鮮明に思い出すのではないだろうか…。

陸上部での印象的な思い出は、この年賀状にある大晦日から年をまたいで行う「元旦マラソン」と夏休み中の「夏合宿」である。

その「元旦マラソン」は、NHK紅白歌合戦を見終えてから中央公園に集合、新年の挨拶を交わしてスタート、次のようなコースで市内の神社を初詣して回るのである。

中央公園 — 福井駅地下道（今はない）— 東大通り — 勝見交差点右折 — 白髭神社 — 火産霊神社 — 豊島交差点左折 — 木田橋通り — 春日交差点右折 — 木田四つ辻 — 山奥町交差点右折 — 公園通り — 朝日山不動寺 — 藤島神社 — 足羽神社 — 愛宕坂 — 左内交差点左折 — 久保交差点右折 — 中央通り — 芦原街道 — 福井大仏 — さくら通り — 神明神社 — 福井神社（解散） 所要時間約2時間

みぞれ、雨、雪、天候にかかわらず陸上部の伝統行事として続けられてきた。寒さや体力の消耗で泣きながら走ることもしばしばであった。一端スタートしたら途中で止めるわけにはいかない。声をかけ励まし合いながら全員で最後まで走り通すのである。そうして、チームの絆、仲間意識が強くなるのであった。

真夜中に、女の子が一人外出するなど今許されるわけがない。しかし、当時は当たり前のように真夜中にお出かけし、2時間かけて市内の神社、仏閣を走り回ったのである。生徒のみんなと走りたいという強い思い（参加の有無は生徒が決める。強制参加ではなかった）と安全な街であったこと、そして、保護者にも信頼されていたからこそできたのであろう。

夏合宿も、保護者の承諾を得て生徒が自主的に参加するものであった。そして、元旦マラソン同様競技力の向上は二の次であった。練習は少々で、メインは自然環境や周辺施設を活用したレクリエーション中心の合宿であった。

夏休みの前半、2泊3日、場所は大野市和泉村。（最初は、大野市勝原）魚釣り、水遊び、ソフトボール、テニス、花火、肝試しなどをして大いに楽しむのである。

しかし、この合宿は、その後「校長会」が「合宿は認めない」という決定をしたため昭和59年からはできなくなってしまったのである。生徒たちから、この時期にしか体験することのできない思い出づくりの機会を奪ってしまった。そして、人間関係の幅を広げるなど、集団の中で個を磨く機会も奪われてしまったのだ。「合宿は認めない」という背景には何があったのかはわからないが、とても残念な決定だった。

2) 地区・県中学校体育連盟陸上競技部副部長

昭和56年度の卒業生を最後にM中学校での学級担任は終わるのである。9年間で4年間しか学級担任ができなかったのである。これが、後の小学校で学級担任にこだわった理由^{わけ}でもあった。

昭和57年～59年度の3年間は福井地区中学校体育連盟陸上競技部副部長、昭和60年度は県中学校体育連盟陸上競技部副部長の役割を担うことになった。

大会の企画・運営、競技力向上のための強化合宿・練習会、市・県陸協・日本陸連ジュニア担当、マスコミ対応、北信越大会の開催などが主な活動内容であった。それまでは、一スタッフとして参加していたが、自らが中心となって実行しなければならなくなったのだ。競技役員や強化コーチの依頼、合宿所や食料の手配、市・県陸協との連携など大変ではあったが貴重な体験となった。

あたりまえのことではあるが、多くの人たちに助けてもらって初めてできたことばかりであった。それまでの人脈を生かし新たな人脈を築く、こうして人間関係が広がっていったのである。また、日本陸連ジュニア担当として全国のジュニア指導者と交流する機会にも恵まれた。部活動指導や選手強化に関する最新の指導法などの情報を得ることができた。

責任の重さを痛感した4年間ではあったが、それまでの学校という世界にはなかった経験をすることができた。

この後、競技部長として再び陸上競技と関わることになるのであるが、この4年間の経験と人のつながりの有り難みを実感することになる。特に、陸上競技協会や高体連、関係業者など学校以外の組織、人と関係した経験が支えとなったのである。

若い頃の経験は財産づくりなのである。

（4）行政機関へ出向…同じ行政でも全く違う世界で

...

教員生活 37 年間のうち 8 年間行政機関に身を置いた。福井市教育員会保健体育課に 6 年間（昭和 61～平成 3 年度）福井県教育庁生涯学習課に 2 年間（平成 14・15 年度）である。だから、私の教員生活は正確には 29 年間ということになる。

市教委保健体育課では、体育指導主事という立場で、学校体育、学校保健、学校安全、学校給食の指導にあたった。学校教育に直に関わることはばかりであり教員が担当することに違和感はなかった。一方、県教育庁生涯学習課は市町村や出先機関が相手に学校教育とは直接の関わりは全くなく、「どうして教員が必要...?」という疑問は今も解けていない。

1) 福井市教育員会保健体育課（現保健給食課）

学校体育・保健・安全・給食は学校の教育活動全体を通じて適切に指導しなければならない。この指導が適切に行われるよう指導助言することが体育指導主事の主たる任務である。具体的には、各主任会での趣旨説明、学校体育・保健・安全・給食研究指定校の研究・実践に対する指導助言、体育（保健体育）の授業、保健指導、安全指導、給食指導などが計画されている学校を訪問、授業参観、全体研究会で指導・助言、小・中教研究集会での指導・助言などであった。

また、学校に関わる当面の課題にも対応しなければならなかった。生徒の下校時の安全を確保する為の「通学路照明灯設置事業」、健康診断や予防接種などの事務手続きの正確さと養護教諭の負担軽減の為の「事務手続きマニュアル」作成、学校給食の食材の一括購入や米飯給食の導入、自校給食からセンター給食への移行などであった。さらに、ファミリーウオーク、ファミリーマラソン大会、国見岳マラソンなど、社会体育事業の運営にも携わった。

この 6 年間で印象深く思い出されることは、それまでに経験したことのない重大な危機管理上の問題に遭遇したことである。

一つは、学校給食による食中毒様疾患の集団発生である。迅速な実態把握、保健所との連携、各学校、保護者への対応、給食センターの指導、さらには事後措置などに奔走した。残念なことに、この食中毒様疾患の集団発生への対応は 2 回も経験することになってしまったのである。1 回目の教訓が生かされなかったことが残念であるとともに指導が生かされなかったことが悔やまれた事件であった。

もう一つは、「食肉センター建設問題」への対応である。地域住民が食肉センター建設に強く反対した、小学生の登校を拒否し公民館（集落センター?）で学習するという事態を招いてしまった。こういった事態を受け、市長、教育長はじめ市の幹部による地区民への説明会が行われた。また、私たち職員は 3～4 人一組で家族が揃う夜の時間帯を見計らって家庭訪問を行った。子どもたちを学校へ通わせてほしいという願いに一軒一軒回ったのである。厳しい反応のなか、願いが届くよう頭を下げて回った。命や生活に直接関わる問題はデリケートな対応が求められるということを強く感じた出来事であった。

学校では経験できない様々な仕事に携わることができたこと、そしてなによりも学校とは違う世界の人たちと出合ったことが財産になったのである。特に、校長として学校経営を任されるようになってからこの時の人脈に支えられることになるのである。

2) 福井県教育庁生涯学習課

平成 11 年 6 月の生涯学習審議会答申「生活体験・自然体験が日本の子どもの心をはぐくむ」では、子どもの心を豊かにはぐくむためには、家庭や地域社会で様々な体験活動の機会を「意図的」「計画的」に提供することが必要であり、平成 14 年度からの完全学校週 5 日制に向けて、子どもたちの体験活動の充実を図る体制を一気に整備するための緊急施策を提言している。

こういった背景の中で、県が平成 14 年度から取り組んだ施策が「合宿通学」であった。小学生が、地域の宿泊可能な施設（公民館、集会所など）を拠点に一定期間（4 泊 5 日）家庭から離れ、寝食を共にしながら共同生活を行い通学する取組である。

その平成 14 年度、県教育庁生涯学習課に参事という立場で勤務することになった。

早速、「合宿通学」の実施に向けた説明会が待っていた。説明会は紛糾した。全市町村で実施、選択の余地がないことに対する反発と未知の事業に対する不安などから異論が出たのである。

各市町村の置かれた状況に応じて、実施要件には柔軟に対応することを条件に説明会を終えた。しかし、自ら出向いて教育長に直談判しなければならぬ町村や、それ以上に時間を要した町もあった。

紆余曲折はあったものの、全市町村で実施することができた。ところが、平成 15 年度は、「実施規模の倍増」というトップからの命令が下ったのである。手を

こまねいては、15年度はじめの説明会は乗り切れない。県の施策の推進役である社教主事を頼るより他に道はない。そこで、各ブロック別の社会教育主事会議に出席し「合宿通学」実施の労をねぎらうと共に感謝の気持ちを伝え、次年度の施策の説明と協力をお願いして歩いた。すんなりとは事が進んだわけではなかったが、それでも1年目よりはスムーズに説明会を終えることができた。

ただ、この合宿通学については、直接子どもの実態を把握できない県が全県下一律に強要するということには自分も抵抗があった。直接子どもと向かい合っている市町村が、子どもたちの実態と市町村の文化、風土、自然環境等に応じた施策を打っていくのが筋であろう。市町村が反発するのは当然であろう。と思う自分が、「合宿通学」事業推進の先頭に立たなければならなかったのである。

この2年間は、生涯学習に係る様々な取組に携わったが、「子どもたちの体験活動の充実を図る」ための施策として取り組んだ、この「合宿通学」が最も印象に残っている。

完全学校週5日制という時代の節目に、その時を象徴する事業に携わることができたことは貴重な経験ではあったが、一方、学校現場と行政とのギャップに悩まされる2年間でもあった。

2. 保護者や地域を意識し始めた40代～50代前半

(1) 保護者の学校・教育に対する関心の高まりを強く実感する(平成4～8年度)

平成4年、6年間の行政経験を終え、教員生活最初で最後の異動希望が叶えられ、15年ぶりに小学校に勤務することになった。広々とした田園風景が広がる福井市の小学校である。保護者から「前の担任の先生より宿題が少ない。もっと沢山宿題を出してください」とか、「親子で短歌づくりや俳句づくりをしましょう」と呼びかけると保護者が積極的に参加してくるなど、学校教育に対する保護者の関心の高まりを今までになく感じたことを覚えている。

この保護者の期待に、「学校での日常の可視化」と「こどもの学びへの保護者の参画」とで応えていこうと考えたのである。

具体的には、次のような取組を行った。これらの取

組を通して保護者との信頼関係の構築を目指したのである。

1) 学級だより...子どもたちの学校(主に学級)での日常を発信

基本は、子どもたちにまつわる情報を提供することであった。登下校の様子、朝の会・帰りの会の様子、学習計画や授業の実態、時の話題、学校行事での子どもたちの活躍の様子、日記の紹介、顕彰の記録、保護者の声などである。

「学級だより」には保護者同士、保護者と学校との情報交換の場、親子の会話のきっかけづくりとしても期待していた。後述するが、保護者の声からその一端が見られた。

2) 学習に保護者を巻き込む

子どもたちと一緒に学習をする(親子で学ぶ)機会をつくった。保護者の方々にも授業や宿題に参画してもらったのである。

保護者が参画した主な学習

保健指導

命の学習

～「わたしの命のルーツ」パート・・・

禁煙教育

「たばこの害」

～たばこ人形による実験中心の禁煙教育。

*喫煙習慣のある保護者には肩身の狭い授業となった

体育学習 — 器械運動、陸上運動

句づくり(俳句、短歌)

学級だよりでの紹介がきっかけとなり保護者が積極的に参画するようになった。そして、保護者の句は子どもたちにとっても良い刺激になり、句づくりに励むようになった。

<保護者の句から>

「はっとする白いブラウスひるがえし かけていく
子に季節を見つけ」

「野球きち女だてらと笑われる 今の巨人じゃ熱も
入らず」

「うたづくり家中伝染口ずさみ 指折り数えニッ
うなずく」

「母の日にカーネーションに言葉なく」

保護者の学習参画が子どもたちの学習意欲の向上につながったのである。

なお、校長として新しい学校づくりに際しても大きな役割を果たす「親子で学ぶ」という取り組みはこのときに芽生えていたのである。

3) 学級担任の通知票…親子で学級担任(私)を評価する

授業づくりや生活指導の振り返りの一環として行った。子どもたちや保護者は自分をどのように見ているのか、次の指導に生かしたいという思いからの取組であった。

1 学年 1 クラス、独り善がりになってしまう恐れがある。いろんな角度からの評価が必要だったのである。

4) バルセロナオリンピック マラソン記録に挑戦

バルセロナオリンピックのマラソンに挑戦しようという試みであった。マラソン競技のスタートと同時にスタート、全員が手づくりのたすきをつなぎながら一人 100 円ずつ走って、42.195 ㎞を走り通すのである。

8 月 6 日、午前 7 時 45 分、挑戦が始まった。保護者からの差入や応援に支えられ、2 時間 18 分 19 秒 05 のタイムで無事完走することができた。

クラスの一体感を強く感じた真夏の朝の挑戦であった。

5) 学級だよりに寄せられた保護者の声より>

①「翔き」(学級だよりのタイトル)をいつも楽しみにしています。発行まで間があると、「どうしたの?」と息子に聞きます。

②早いもので今年ももう少しで終わりです。わが子もあと少しで小学校生活を終えようとしています。今年は「翔き」を通して学級の様子がよくわかり、子どもと一緒に歩んできたという感じでした。

③いよいよカウントダウン。あっという間の一年間でしたが、今振り返ってみますと充実した中身の濃い一年だったと思います。大変幸せだったと思います。また、俳句に短歌、詩集、楽しいスナック etc…そして、一年間がぎっしり詰まった「翔き」、どれもこれも宝ものです。大切にしたいと思います。

子ども・保護者との信頼関係は情報の提供であり、情報の共有であると得心した。この小学校での 5 年間の手応えが、地域との関わり方の一つの指針となるのであるが、こんなかたちで保護者を、地域を意識し始めたのである。

余談 3: 卒業証書の浄書

「うらが若い頃は学級担任が書いたんじゃない…」

平成 4 年度の三学期を迎え、卒業に関わる役割分担などが話題になったとき、当時の Y 校長が発した言葉である。6 年生を担当していた私には殊の外大きな声に聞こえた。

卒業式は、入学式と並んで学校では最も大切に行っている儀式的行事である。特に、卒業式は入退場やお辞儀、返事、歌等の練習が入念に行われた。

卒業式のメインとなるのが卒業証書の授与である。この卒業証書の名前を学級担任が書いていたというのだ。なぜそう思ったのかは記憶にないが、校長の話を聞いて「自分で書いてみよう」と思ったのである。幸いにして、友達に 10 数年来家族ぐるみでつき合いのあった書家の Y 氏がいたので、彼に手本と手ほどきをお願いし書きあげた。

卒業証書の浄書は、学級担任として 2 回、校長として 2 回経験することができた。一人ひとりの顔と出来事を思い浮かべながら未来へと大きく羽ばたいてくれることを願って書く時間は自分自身の 1 年を振り返る時間でもあった。Y 校長の一言がなければこの貴重な体験はできなかったであろう。

いつか自分の書いた卒業証書を見たいものである。

(2)「教育最優先」の町で地域の力を実感する(平成 9 ~ 10 年度)

平成 9 年 4 月 1 日、幼稚園を併設する複式の小学校に新任の教頭として勤務することになった。自然豊かな山合いにある美山町 S 小学校だ。少子化による統廃合が行われ、今はその校舎だけが残っている。

待っていたのは、19 人の小学生と 9 人の幼稚園児、初めての複式授業、PTA の庶務・会計、地区各種団体の窓口、美山教研体育部長、子供会育成会担当などであった。教頭の職務をはじめこれまでにあまり経験のないことでとまどいもあったが校長をはじめ地元の先生方のご指導のお陰で充実した 2 年間だった。

当時の町長さんのお話はいつも「教育最優先」から始まるように、この町では教育をとっても大切にしていた。町は全ての小・中学校を、それぞれの地域では地域の学校をしっかりと支えていた。地域ぐるみで子どもを育てる、地域の子どもは地域で育てる文化が息づく町だったのである。

1) 地域をあげて子どもを、学校を支える

a. 体育大会

この町の体育大会は学校と地区が一体となって行われていた。地区民がこぞって参加し、秋の1日を楽しむのである。ここで、私はそれまでには見たことのない光景に出会った。その地区の中学生全員が参加していて、用器具の準備などの裏方を一手に引き受けていたのだ。この町のどの地区でも、中学生が体育大会を支えているのである。中学生の働きぶりを見た子ども達には、中学生になったら自分が体育大会を支えるのだという意識が自然と育まれる。地域の大人達は、彼らに中学時代の自分を重ね合わせながらたくましく成長した後輩達を温かく見守る。地域の子どもは地域で育てる文化が継承されていたのである。

b. 収穫感謝祭などの学校行事

毎年秋、収穫感謝祭が行われる。地域の方々も楽しみにしている学校行事であった。子ども達は、「ふるさと学習」(総合的な学習の時間)で学んだことを発表したり、模擬店を出したりして地域の方々のおもてなしをする。保護者は焼き芋(子ども達が育て、収穫したサツマイモ)とおでん(各家庭で育てた大根や里芋など)でおもてなしを、地域の方々はお漬物など各家々に伝わる料理でおもてなしをする。子どもの、保護者の、地域の方々のそれぞれのおもてなしが子ども達の心を育てないわけがない。ここにも、地域ぐるみで子どもを育てる文化が根づいていた。

収穫感謝祭で忘れられないことがもう一つある。ふるさと学習の発表で、2年生の男の子が原稿用紙2枚分の発表を原稿を見ずに発表したことだ。担任の先生はとっても心配だったようであるがやり遂げたのである。家で、一生懸命で練習したそうだった。地域の人たちの前で発表するということが、彼に必死の練習をさせ、原稿なしで堂々と発表させたのだ。校内マラソン大会もしかりである。練習の時は、途中で歩くことのある子どもも、応援に駆けつけたお爺ちゃん、お婆ちゃんたちの前では走り通してしまうのだ。地域の人たちに見られていると、子どもは一生懸命になる。地域の眼差しが子どもの成長を後押ししているのである。

c. 美山町教育研究会

「教育最優先」の町の推進母体となっているのが美山町教育研究会である、と私は思っている。国際化教育、集合学習、宿泊学習、校外学習、水泳大会、連合

体育大会、連合音楽会、子供会育成会と学校が一体となったソフトボール大会・卓球大会、修学旅行など連合行事の実施と教育研究を行う教職員の組織である。この組織を美山町は全面的にバックアップしてきた。

美山町教育研究会は、昭和30年2月の美山村誕生(下宇坂、芦見、羽生、上味見、下味見村)を機に「村内の児童生徒の教育向上と教員相互の融和を図る」ことを目的として発足した。具体的な取組としては、連合行事の実施と先進校視察であった。

昭和48年、美山町教育研究会は更なる充実・発展を遂げる。教職員の「美山町教育の発展にける思いと専門職としての自己研修意欲」が次のような理想を掲げさせたのである。「町内の6幼稚園、6小学校、1中学校の学校の壁をなくして町内全教職員が研究主題をかかげて協力し合って研究し、実践し、その成果を毎年発表し合うことにすべきである。」(あゆみ, 1981, P. 2) 今、教育改革のなかで声高に叫ばれている幼・小・中一貫教育を昭和48年にめざそうと決めていたのである。

昭和48年度理事会で、この理想実現に向けて研究組織を再編成することになり、昭和49年度から教育研究の基盤整備に着手し、昭和50年度には「教育研究集会」が始まった。

こういった背景には、次のような美山町の現実があった。当時の教育長Y氏が「研究実践記録発刊に寄せて」と題して次のように述べている。「美山町は昔から農林業が主たる生業でしたが、現在農林業で生活の維持が出来ず、福井・大野市と町外に職を求めています。したがって町民の学校教育に対する関心度は極めて高く教育に対して非常に熱心であります。それはかかってわが子の豊かな成長と無限の可能性の伸長に大きい期待を寄せているからであります。これにこたえるのは、先生方のお力に待つ以外はございません。町民のこの期待にこたえるべく益々教育研究とその実践に努力され、力を結集して美山町の学校教育の前進発展を心から切望し挨拶にかえます。」(Y, 1981, 巻頭言) そしてまた、当時の美山町の教員はほとんどが美山町民であったことも大きな要素であったのではないかと想像されるのである。

「地域の力」、「地域ぐるみで子どもを育てる」を具体的に実感した2年間であった。どうもこの2年間で、私の中に地域連携のタネが蒔かれたようである。

2) 管理職としての在りようの一端を学んだ一枚の黒板

教頭2年目の平成10年4月、M氏が校長として着任。1ヶ月後、児童玄関に面した校長室の壁面に1枚の掲示板が掛けられた。それから、その掲示板には校長の手書きによる校長の思い(想い)が綴られるようになった。

内容は、四季折々の校区(地域)の自然、時の話題、通勤の道すがらの情景などに校長の思いや感想が添えられたものだった。そして、「今日は何かいいいことがありそう」「春もまちかでしょう」といった、今日一日の元気を、明日への意欲を与える一文で結んだり、俳句や歌を生かした表現などで子どもたちに語り始めたのだ。

どう生きるか 和歌山で信じられないような恐ろしい事件が起きています。この事件からみなさんは、何を考え学んでいるのでしょうか。友達と話し合いませんか。

きれいな環境で、きのう隣の国から大事なお客様が日本に來られました。明日この学校に大事なお客様が來られます。教室をきれいにしておきましょう。

下の句を考えて応募しましょう 宇宙飛行士の向井千秋さんから、次のような句が地球に伝えられました。「宙返り何度もできる無重力」下の句を募集しています。

隣の国から來賓 今中国の国家主席「江沢民」氏が日本に來られています。両方の国が仲良くするための話し合いです。ニュースをしっかりと聞きましょう。

小春日和 ここ2、3日暖かくて気持ちのよい日が続きますね。晩秋から初冬にかけての頃に見られる、今日のような天気を「小春日和」といいます。

若竹ののびゆくごとく 子ども等よ 真直ぐのばせ身をたましいを 若山牧水

掲示板の内容が新しくなった朝は、子どもたちが掲示板の前に足を止め、食い入るように読んでいる光景が繰り返された。子どもたちの好奇心を揺さぶるものであったことを現す光景だった。

M校長の取組は、子どもたちに語りかけながら自分を取り巻く様々な事象に目を向けさせたり、俳句や歌などへの関心を高めるなど子どもたちを啓発することをねらったものと私はとらえていた。また、この一枚の掲示板は子どもたちに語りかけるという形をとりな

がら教職員にも語りかけていたのだ。子どもたちの指導に生かしてほしい、世の中の動きや自然の営みの素晴らしさなどにも関心を持ってほしいという校長からのメッセージだったのだ。そして、最も注目したことは、我々教職員がこの掲示板を通して校長の考え方や人となりを垣間見ることができたことだった。1枚の掲示板が校長と教職員との距離を縮め、会話を生み、相互理解の深まりへと導いたのであった。

この掲示板の役割の大きさを実感してしまった者として、手をこまねいてはもったいない。というわけで、教頭として2つ目の学校への異動を機に、掲示板の代わりにA4用紙1枚で、M校長の「教職員に語る」の山下バージョンを始めることになるのである。

このA4用紙1枚のおたよりは、「せんせい あのもの」から「せんせい あのもの」、そして「和話輪」とタイトルは変わっていくのであるが、自身の学校経営の一つの柱として退職まで続けることになってしまいうのである。

(3) 教頭はどう動く... (平成11~13年度)

1) 教頭の役割を考える

2年間の教頭経験から、教頭に期待される役割は、学校長の学校経営方針のもと展開される教育目標の実現に向けた取組を支える環境づくりであろう。アットホームな中にも厳しさのある職員室づくり、働きやすい環境づくり、職員の目の届かないところや手薄なところを埋める、教員の意識改革、情報提供などに努めることで環境を整えようと考えていた。

まずは、学校の有り様として「笑顔と思いやりで一杯の学校」、集団の秩序として「時間と期限を守る」ことが環境づくりのはじめの一步であることを強く訴え、共通理解を図った。

特に、「笑顔と思いやり」については、毎年度始めに次のように呼びかけてきた。学校とは、教師と生徒が力を合わせて航海するクルーのようなものであることから年度はじめの誓いの言葉として呼びかけた。

スマイル&思いやり

今年も「笑顔」と「思いやりで一杯の学校」にしていきたいと思います。

一人ひとりの力を一つにするのは「笑顔」であり「思いやり」の精神だと思います。

『笑う門には福来たる』

楽しいときには笑顔が生まれます。

元気な顔には笑顔が似合います。

一生懸命の後には笑顔がつきものです。

課題を乗り越えたときには自然に笑顔です。

笑顔のある学校には、きっといいことがあります。

そして、思いやりのある学校には、優しさと厳しさと支え合う強さがあります。

『思いやり』とは

自分がしてあげたことは忘れること

自分が他人にもらったことは決して

忘れないこと

ということはある先輩からお聞きしたことがあります。

○中学校の平成□□年度がスタートします。

こんな思いやりの気持ちで新たな校風を作っていきたいと思います。

そして、次のような実践を通して環境づくりに努めたのである。

a. 「せんせい あのね」の配布

教頭会、研修会、教育雑誌、書籍、新聞等で得た情報や学校生活の中で気づいたこと、あるいは気になったことなどを提供し、先生方の意欲の喚起と意識改革の一助にしたいという願いを込めて始めた「せんせいあのね」No.1の配布は1999年4月28日であった。

当時は、ゆとりと総合的な学習の導入を柱とする学習指導要領の改訂がなされ、いわゆる移行期にあったので、各学期に1～2回、新聞記事・教育雑誌・指導主事等から得た「移行期の学校づくり」に関する情報を提供している。このように、時機を逸せずタイムリーな情報の提供を心がけた。しかし、一方的な情報提供にならないよう、年度末にはアンケート調査を実施し、先生方の意見や要望に耳を傾け誌面の充実に努めた。

また、書籍(例えば、相田みつを著「いのちのことは育てたように子は育つ」など)から素敵な言葉や文章を引用して、子どもと向き合う先生方がちょっと立ち止まって自分自身を振り返る機会を提供することも大切にしてきた。そして、生徒の日常の姿や授業の様子、先生方の取組などを紹介し適度な刺激も提供してきた。

2年目には、「せんせい あのね」が「せんせい あのね」に変わった。「あのね」は子どもっぽくないか・・・? 先生方に失礼でないか・・・? 福井の学校だから福井弁を使ってみるか・・・? といったようなわけ(というより単なる思いつき...)で「あのね」と変えた。

「せんせい あのね」は先生方の意欲の喚起、意識改革の一助となることを願って始めたものだが、年を

重ねる毎に、いろんな角度からの情報を提供していくようになった。そして、「せんせい あのね」に先生方の力量形成を側面から支えるという役割の一端を担わせようという意図が強くなっていった。

b. 生徒とともに...

前任校のような小規模校ではあり得ないことであるが、教頭という立場は「生徒とともに」という機会が少なくなってしまうものである。生徒が見えなくなってしまう。生徒が見えなくては適切かつ有効な環境づくりに支障をきたしてしまうのである。

そこで、まずは授業を1講座持たせてもらった。しかし、週3時間の授業では一部の生徒に限られてしまう。前任校でも実践してきたことであるが、毎朝7時45分頃から8時10分まで、生徒玄関で「おはよう」の挨拶をすることにした。1日の学校生活を気持ちよく始めてくれることを願って、笑顔を添えて大きな声で生徒達を迎えることにしたのである。この取組は退職まで続けた。

生徒の実態は、清掃の様子やトイレの使い方、下足箱やロッカーの使い方、校舎周りの側溝の状況などから見えてくるものである。校舎内外の点検や生徒の活動の様子から、改善を要することについては担当教諭に指導をお願いするが、清掃などは口で言うより態度で示す方が効果的であった。生徒と一緒に掃除をすることにした。この方法も、退職まで続けた。さらには、部活動や体育の授業の体力づくり運動にも参加し生徒と一緒に汗を流す機会を持つよう心がけてきた。

このように、できるだけ生徒とともにあるようにしてきたのである。

余談4：雑談のできる職員室

教頭の役割は、職員の声に耳を傾け、意をくみ取り、適度な刺激を提供し、激励・賞賛し、意欲を喚起し、風通しのいい和やかな中にもピリッとした緊張感のある教員集団を作ることであろう。まずは教頭自らが自分を開く。キーワードは、語る、支える、受け止める、仕掛ける、共に動くである。教頭が職員にとって身近な存在でありたいというのが、私の願いであった。

この願いを叶える一環として、プライベートな時間のつながりを大切にしてきた。

蛍の季節や星空の綺麗な夏、田園風景が広がるわが家の庭先に先生方を招待しガーデンパーティを楽しむのである。子ども連れ、家族ぐるみ、恋人連れ...すべてOKである。仕事のことはスカッと忘れ、生ビールを片手に焼き鳥、焼きそば、焼きおにぎりなどに舌鼓を打ち、雑談の花を咲かせるのである。こういう雰囲気の中で、学校の日常では見えない人となりが見えるのであり、自分をわかってもらうチャンスなのだ。こういったコミュニケーションの機会を持つことが日常の職員室の会話にも生きてくるのである。

思いの丈を語ることができる職員室、思いの丈を受け止めてもらえる職員室、助けを求めることができる職員室、援助の手がずっとさしのべられる職員室、家族や子どもなど身近な話題で雑談のできる職員室、そんな職員室の下ごしらえとしてのガーデンパーティだったのである。

平成4年から始まった管理職としての10年間、福井豪雨災害で被災した2年間は毎年行ってきた。(一時期、わが家以外で行ったこともあったが...)

このコミュニケーションは、退職当時の仲間と今も続いている。

2) 危機管理能力を問われる

平成13年3月12日、脳内出血で校長が倒れる。翌日は卒業記念品贈呈式、翌々日には卒業式という日であった。その後も、進級認定会、教職員の異動に関わる諸会議等、校長として対応しなければならない重要な案件が目白押しであった。しかし、校長は入院し学校には不在なのである。校長との報連相、市教委との報連相、そして職員と意志の疎通を図りながらの対応となった。市教委から校長代理の指示があったが、初めて遭遇する事態であり大いに戸惑った。とにかく、目の前の行事を校長に代わって計画通り粛々と進めなければならなかった。その時の一番の問題は、卒業式の校長式辞であった。校長から「左側の袖机の下の引

き出しにある」と連絡があり少し気持ちが楽になった。しかし、卒業式まで2日、式辞を読む練習、卒業証書の名前を読む練習、卒業生保護者へのお祝いと感謝の意を伝える挨拶文づくり、校長不在の卒業式となった経緯と了解を得る卒業生保護者宛文書の作成(来賓には当日朝口頭で伝えることにした)卒業式の動きの確認などやることは山積みされていた。校長、市教委の指導を仰ぎながら卒業式当日を迎えた。

何とか滞りなく卒業式を終えることができたのは、何と言っても式辞が準備されてあったことだ。私自身も、1週間前には式辞の準備をしておくことを守って5回の卒業式に臨んだ。何事も「段取り八分」と言うが、そのことを教訓として肝に銘じた出来事であった。

卒業式後も、卒業・進級認定会、修了式、人事異動に関わる校長会への出席など慌ただしい年度末であったが、職員の協力もあり大過なく1年を終えることができた。

青天の霹靂のような事態であったが、私にとっては貴重な体験となったのである。そして、1年後には、この経験が早くも生かされることとなった。

平成13年12月6日、再び脳内出血で校長が倒れるという事態が起きたのである。

またしても、校長代理として学校運営に携わることになった。しかも4ヶ月もという長丁場を教頭と校長の2足の草鞋を履くことになるのであるが、職員は、教務主任、学年主任を中心にがっちりとスクラムを組んで難局を乗り切ってくれた。

2度にわたる校長代理の経験は、自身が校長という立場になったとき若干の余裕を持たせてくれた。人は体験や実践を通してこそ学ぶことができるのであり、成長することができるのであるということを、身をもって実感したのである。

3. これからの中学校教育の有り様を追いかけた50代後半

平成16年4月1日、坂井市と境界を接する福井市M中学校へ新任校長として赴任することになった。学校経営の責任者となったのである。平成18年度からは福井市S中学校に異動。この5年間は教育改革の真っ只中にあり、「学校改革」「教員の意識改革」が教育界の喫緊の課題であった。一方では、いじめ、不登校、規範意識の低下、学校裏サイトなど中学生を取り巻く

状況はますます深刻になってきていた。さらには、モンスターペアレンツと呼ばれる保護者の出現、教員の不祥事など学校に対する批判や風当たりが厳しくなってくるなど、学校教育が大きな転換期を迎えた時に学校を任されることになったのである。

こういった状況の中、責任者である校長は、様々な情勢の変化や物事の真偽を見誤ることなく、冷静な判断力を持ち続け、国や県の動静を見極めた上で、学校経営に努めていくことを求められた。しかも、これからの学校教育がどう変わっていくかという待ちの姿勢ではなく、自らの力でどう変えていくかが問われていたのである。

「生徒が学びたい 保護者が通わせたい 先生方が勤めたい学校」、これがわたしの目指す学校の姿である。この願いを叶えるための学校づくりの視点として次の3つを掲げた。

教える側の論理中心の教育から親や子どもの求める質の高い教育への転換

学校を子どもの社会的自立の準備の場、一人ひとりの多様な才能や力を引き出す場にする

「我が子が安心して通える学校であってほしい」という親の願いをかなえること

そして、この実現に向けて、「授業改善と学力の充実」「生徒活動の活性化」「授業や生徒の活動を積極的に公開」を実践目標とした。

また、目指す学校の実現にはしっかりとした経営基盤(組織)が必要不可欠であると考え

職員の和を第一とし「雑談のできる職員室」とする

教職員の個性と特性を最大限に引き出し学校経営の活力源とする

「子どもは教師の鏡」を生徒指導の指針とする

私の学校の誇れるものはこれだという活動を創る

子ども、保護者、教職員の願いを集大成した学校経営に努める

といった実践を通して基盤を築こうと考えたのである。

(1) 校長に何ができる...

校長といっても、その前には教頭であり、さらに溯れば教諭(私の場合は助教諭まで溯る)である。立場が代わるのに伴って、責任の重さが増し、マネジメント能力やリーダーシップがより強く求められるように

なる。このことが「校長が変われば学校が変わる」と言われ、校長は学校にとっては最も大きな期待を寄せる存在である所以なのであろう。

この期待にどう応えるか...。私は、「生徒とともに、先生方とともに、地域とともに、学校づくり...」で応えてきたのではないだろうか。生徒を知らずして、先生方を知らずして、地域を知らずして学校づくりはできないであろう。

1) 目指す学校づくりのはじめの一步...

a. 生徒とともに

教頭になると授業時数が極端に少なくなる。せいぜい週3~6時間程度である。校長になると授業を持たせてもらえない。ますます生徒から離れてしまうのである。できるだけ生徒に近い立ち位置を確保したり、できれば同じ体験をしたりして、生徒の息づかいを間近で感じる機会を持つことを心がけた。

具体的には、つぎのようなことである。

朝の挨拶: 生徒玄関や通学路に立つ。掃除: 清掃指導の成果が芳しくない場所を中心に掃除場所を巡り、生徒と一緒に掃除をする。写生大会: 生徒と一緒に絵を描く。マラソン大会: 生徒と一緒に最後尾を、励まし、元気づけ、声援を送りながら走る。授業や部活動に参加: 主にトレーニングを一緒に行う。

b. 教員を生かす

健全に機能する組織でなければ目標は達成できない。機能する組織はモチベーションが高く、協調性があり、優れた創造力を発揮させるのである。スタッフが支え合い、成長し合える組織こそが機能する組織といえよう。

私の人材育成の基本方針は「スタッフのアイディアを生かす」ことであった。スタッフの提案には、よほどのことがない限り「NO!」とは言わない。「とにかくやってみる。まずければ即変えればいい。責任は校長が取る。」というのが私の基本的なスタンスである。

ただし、前例踏襲厳禁である。常にチャレンジスピリットを忘れない。学校や教員にとっての不易とは「変わり続けること、学び続けること」であり。「例年通り」から進歩は期待できない。スタッフのアイディアを生かすことが意識改革に繋がるのである。しかし、生徒の生命や安全に関わることは慎重に判断してきた。

スタッフのアイディア満載の取組

連合音楽会に向けた武者修行

小学校へ出かけての合唱披露

三世代交流立志式

立志式に祖父母、保護者を招いてのディスカッション

二学期制に伴う懇談会の改革 = 過程での保護者懇談 & 三者懇談

学期の中間（夏・冬季休業前）での保護者懇談会実施、懇談形式は三者懇談。中間テスト結果から観点別に学習成果を明らかにし休業中の課題克服につなげる。

「いつでもできる どこでもできる。〇〇の子」(小中連携5項目 = 中学校区教育の柱)

公民館と連携し地域ぐるみでの子育てをめざした。

「全員参加の部会組織で学校運営」

全職員が学校運営に直接参画する部会組織の立ち上げ。

「授業研究会を変える

授業研究会の主人公を「授業者」から「参観者」へ転換。

「授業の見方を変える」

「教師の振るまい」から「生徒の学びの様相」へ。

「参観記録を書く」

授業の意義を生徒の実名を挙げて観察した事実で書く。

「研究紀要は全員で」

教師全員が授業実践記録（問題解決型学習のひとまとまり）を書く。

「SSLの編集」

学び方に関する手引き書を編集

地域説明会

教育内容等の説明及び情報交換

地域公開講座

これまでの授業参観を発展的に解消、授業を地域に公開すると共に授業の参観から参画（体験）へ。

ボランティア活動の義務化

希望者によるボランティア活動から全員参加のボランティア活動へ。ボランティア活動の価値を全生徒に体験させる。

子育て応援井戸端会議

PTA とのコラボによる子育て研修

一方で、校長室のドアを常にオープンにする（校長室の可視化）ことや職員室に足繁く顔を出すことを心がけてきた。話しやすい環境をつくり、積極的に話しかけ、話しかけられるようにしたのである。先生方を

知りたいだけでなく自分自身を知ってもらいたいという思いから、デスクワークに支障を及ぼさない範囲で日常的に話しかけるようにしてきた。校長が話す機会は、だいたい月に1回の職員会議や全校集会、職員朝礼ぐらいのものであろう。しかも、話す人と聞く人であって会話は生まれない。会話から互いの気心を感じとり、親しみが生まれてくるのである。組織（職場）の良好な人間関係は「雑談のできる組織（職場）」にかかっていると言っても過言ではなかろう。そして、気軽な雰囲気での雑談から素敵なアイデアやユニークな発想が生まれてくるものである。学校現場に教員評価が導入され、管理職も教職員も負担増などで苦勞しているという声を耳にするのであるが、職場環境や人間関係をよくするための雑談の機会をとらえるというのはどうであろうか。外野席の無責任な発想と一蹴されてしまうかも知れないが...

また、自分自身を知ってもらうこととして、前節でも述べたのでここでは詳細は省くが「和話輪」の配布も行ってきた。

c. 地域を知る

第2節で述べたように、40代になった頃から地域を特に意識するようになった。保護者や地域の方々の学校に対する関心の高まりを感じるようになったからである。

まずは、この目で見て、耳で聞いて、地域を知ることから始めた。情報を求めて地域に出て行った。特に、地域の情報源である公民館には足繁く通った。また、要請を受けた会議・行事等には、よほどのことがない限り自ら出席した。自治会長会へは、こちらから要請をして出席させてもらった。自治会長会は地域の最高決議機関である。地域の協力を得るには自治会長さんの手を煩わすことになることから事前に自治会長会で了解を得るようにしてきた。

このように、いろんな機会をとらえては出かけていき、「今学校では...、今子どもたちは...、今先生方は...」と大いに語り、顔を売ることにも心がけてきた。この「生徒を、先生を、学校を語る」ことは、校長にとって最も重要な役割である。直接会って話せば、顔見知りも増え、協力や応援、支えとなって学校へ返ってくるのである。

さて、地域との関係づくりで、私にとって最も恵まれていたことは、面識のある人が沢山いたことである。出向きやすく、気兼ねせずに話ができる、地域の

ことを教えてもらえるなど好都合であった。人とのつながりに感謝、感謝であった。

学校所在地区自治会長は福井市出向当時の上司、同窓会長は高校の英語の先生であり先輩校長、部活動外部指導者は先輩教員、自治会連合会長は福井市出向当時の教育委員会職員、公民館長は福井市出向当時の直属の上司、学校評議員は息子の大学同窓会の役員こういった人たちを介して新たなつながりが生まれていった。そして、我々業界とは異なる視点からのアドバイスや支援は学校改革推進の力となったのである。

以上のように、これからの学校は、地域と連携・協働する中でその役割を果たすことができるのである。このことについて、前福井市教育長渡邊本爾氏は次のように述べている。

公立学校は「地域の学校」である。「地域に根づく学校」である。そして、学校は「地域のシンボルである。学校は常に、「地域学校」として、その基盤を築き、地域と一体となる中で、学校としての役割を果たすことができるのであり、好むと好まざるにかかわらず相互に影響し合う関係にあると言える。だからこそ、その営みを充実させることが、今後の学校教育にいつそう求められているのである。(渡邊, 2009, p. 53)

校長5年間の経験から確かなことと言えることは、地域との関係づくりは「校長のトップセールス」であるということだ。校長という立場は地域の人たちに一目置かれる。同じことをお願いしても、校長がお願いすれば了解も得やすく即断できるのである。また、校長は臨機応変に動くことができる。校長が道筋を付け、各担当が具体的に動くのである。

「校長のトップセールス」である地域との関係づくりを通して「地域の学校」づくりに努めた。

d. 地域と学校、子ども、教員がお互いに見えるようにする

地域に信頼される学校づくりは校長の大きな役割の一つである。これまで小学校に比べ地域との関係が希薄であった中学校が地域の信頼度を高めるためには、学校を開くことであろう。授業や学校行事など学校を丸ごと見えるようにすることである。まずは、実際の学校を、生徒を、教員を見に来てもらう。つぎに、生徒が、教員が地域に出ていきボランティア活動などに取り組む姿を見てもらうことにしたのである。

学校への信頼度を高め、理解を深めるには、実際に活動する姿を目で確かめることが最も効果的である。

そして、適切な批評やアドバイスが期待できるのである。「地域に見える活動」の実践 - 評価(振り返り = 省察) - 再構築 - 実践のサイクルを通して信頼度が高まり、良好な関係が築かれていくのである。

E. その他

校長になるまでも、校長になってからも、首をかしげることやこうしたらいいのでは思うことがあった。何十年も前のルール、システム、考え方がいまだに守られ続けている。守旧派の教育界は変化に対する抵抗が強く、回りをながめて前例があるかないかを確かめて初めて改革に踏み切るのがこの業界の常識なのである。教育界の常識は世の中の非常識と言われる典型的な例である。

例えば、校務分掌組織だが、40年前に初めて目にした組織とほとんど変わっていない。電子機器の導入によるスピーディで効率的な事務処理や情報の収集ができるなど、世の中は大きく変化したにもかかわらず、学校の組織は旧態依然としているのが現状である。

中学校の教員は多忙である。部活動、様々な校務分掌上の仕事を一人何役もこなしている。また、それぞれの校務分掌には複数のメンバーがいるため、打合せなどの無駄な時間が費やされる。このことを解消するため、全員が一人一役を原則に校務分掌を再編した。全職員が学校運営に直接参画できるようになった。そして、学校運営への直接参画は職員の責任感と意欲を高め、多忙化の軽減にもつながるのである。

もう一つ、「自転車通学の範囲」について保護者との間でトラブルことがある。線引きが問題になるのである。4 車線の道路を挟んで、学校に近い側は徒歩、反対側は自転車と区分されていると、徒歩通学側から要望があがる。このルールが決まった頃には問題にならなかった。ところが、道路事情や不審者対応など状況がかわったことから要望が出てくるのである。一カ所許可してしまうと終始がつかなくなってしまうのである。

駐輪場のキャパ、道路事情などから全ての学校で可能とはいえないが、自転車通学区域を学校が決めるのではなく、生徒と保護者の責任で通学方法を決めればよいのである。これからの中学校は、自らの意志で決め、自己責任で通学する生徒が育つ学校でなければならないのである。

他にも、次の項で詳細を述べる「卒業式のあり方」、「修学旅行の実施学年及び実施時期」の改革。さらに

は、職員朝礼の持ち方、転任・新任の挨拶回り、先生の日創設（月曜日放課後は部活動休み、教員の時間）などにも取り組んだ。

こういった取組は、朝早くから時には深夜まで職務に当たらなければならない程の多忙さの軽減、教員の本分である授業に力を傾注できる環境を整えること、自ら考え、自ら判断することのできる力を持った生徒を育てる、この3つの実現のための取組であった。決して、校長のトップダウンで実現したものではない。職員と慎重かつ丁寧に議論を重ね、全職員の総意で取り組み実現したものである。

（2）学校を地域に開き信頼度を高める（平成16～17年度）

「校長、中学校は敷居が高こうてあかんわ…」これは、平成16年5月27日（木）福井市M中学校、第1回学校評議委員会での自治会連合会長Y氏の発言である。Y氏は、さらに「子どもに挨拶をせいで言っていながら、うらが挨拶しても知らん顔して通り過ぎてしまう先生がいるぞ…」子どもらの自転車の乗り方、なつてえんぞ…。歩くのも道一杯やし、何教しえているんや…」と続けた。このY氏の発言は、校長が変わったこの機会に地域の声として伝えたかったのであろう。と同時に、地域の子供達をしっかりと育ててほしい、先生方に期待している、という我々教員に対する叱咤激励であると受け止めた。

Y氏の「敷居が高い」という発言は、小学校に比べて中学校の方が地域との関係をあまり重要視してこなかったことに起因していると考えられた。このとき、地域との関わりや地域の方々との交流の機会を増やし、地域に信頼される学校にしていかなければならないと強く感じたのである。

1）信頼度を高める「地域に見える活動」

敷居が高いということは、中学校へ行きにくい、地域と距離ができてしまっているということだろう。とにかく、「敷居を低く」しなければならないのだ。まずは、保護者の方々、地域の方々に学校へ来てもらおうと「学校開放日」を創設した。学校を開き、生徒・教員・学校が何をしているのか、活動そのものを見てもらうことから始めた。学校開放日の案内は全戸に回覧し、生徒が制作したポスターを各町内の掲示板に掲示して、地域の方々の参加を促した。

さらに、地域行事への参加やボランティア活動など、生徒が地域で活動する機会を増やし、地域でも、子どもたちが活動する姿を見えるようにしていった。

< 地域に見える活動の実況 >

学校を地域に開く

授業や学校行事などを積極的に公開する（学校開放日）

ボランティア活動

地区体育祭のお手伝いボランティア、夏祭りの準備ボランティア、「よさこいチーム」を結成し夏祭りに参加、福井を美しくする運動への参加など地域行事でのボランティア活動

地域行事への参加：駅伝大会、文化祭

こういった「地域に見える活動」を通して、学校への信頼を取り戻していこうと考えたのである。

2）2学期制の導入

福井市教育委員会は、「学校週5日制」による「学びの断続」は、子どもから「学ぶことの意義」を見失わせ、「学ぶことの楽しさ」を奪い、「学ぶことの充実感」や「学んだ自信」を縮減させた。「学校週5日制」から見えてくるこうした負の影響を「学びの継続」という視点からプラスに転換させなければならない（渡邊，2009，p.45）として、平成18年度から福井市に「2学期制」を導入した。

M中学校では、学びの継続、授業時数の確保といった観点から、平成15年度中に「平成16年度からの2学期制導入」を決断していた。就任早々、研究主任を中心とするプロジェクトチームを編成し、2学期制導入の意義、導入に伴う具体的な対応策を検討しなければならなかった。また、保護者や地域に説明し、理解を求めなければならなかったのである。周知については、PTA総会、学校評議員会、公民館の広報システムを活用するなどして行った。

この議論では、「学びの継続」という観点から保護者会の持ち方を大幅に見直したことで、学習評価、通知票の内容（形式、文言など）についても全面的に見直したことが大きな成果であった。そして、最大の成果は、この議論を通して先生方の意識改革につながったことであろう。

3）過程での保護者懇談（三者懇談の導入）

「長期休業を、子どもたちの「学びからの開放」と捉える時代は過ぎた。1年365日のうち、学校の授業

日が 200 日であるとき、長期休業もまた、「学びの継続」という視点から捉え直さなければならないと思う。」(渡邊, 2009, p.45) この「長期休業もまた、「学びの継続」という視点から捉え直さなければならない」をどう具体的に実現していくのか。私たちは次のような取組で対応していった。

保護者会は、従来通り年 2 回、夏季・冬季休業前に三者懇談形式で行う。持ち方は、保護者懇談会までのテスト結果(テスト用紙を綴ったもの)などを主な材料として、優れている点や弱点として克服しなければならないことを三者で確認する。そして、休暇中の学習について具体的な内容や方法を確認する。三者懇談は原則として、保護者との時間もとるなど臨機応変に対応するものとした。なお、保護者の都合等に配慮し、午後の時間帯に 3 日間で実施した。

通知票は、年 2 回、毎学期終了時に生徒と個人面談をして渡す。それまで、通知票は、毎学期末、保護者と学級担任との懇談を通して渡してきた。(3 学期だけは生徒に直接...) よく耳にしたことは、担任の思いが確実に伝わらないとか、マイナス面が強調されすぎ意欲を高めるはずが意欲をなくしてしまうなどといったことである。こういったことを解消するためにも、生徒と担任が面談をして成果や課題を明らかにし、一層の学力充実と成長につながる通知票渡しにしたかったのである。

この保護者懇談、通知票渡しの改革に伴い、テストや作文などの学習成果を綴ること(ポートフォリオ)にも取り組んだ。生徒の学びの履歴をもとに懇談、面談をするためであり、「学びの継続」を意識した実践であった。

4) 地域ぐるみで子育て(中学校区教育)

いつでもできる

どこでもできる ○○の子

- ・すすんであいさつをしよう
- ・話しはしっかり聞こう
- ・ていねいな言葉で話そう
- ・みんなと仲良くしよう
- ・自分のことは自分でしよう

「いつでもできる どこでもできる ○○の子」

これは、義務教育の 9 年間で、M 中学校区の子どもたちにしっかりと身につけてほしいスキルである。福

井市の課題別研修会で学んだ、千葉県八街市の実践を参考に、M 中学校区の子どもたちの実態に基づいて、小・中の教務主任と研究部を中心に議論してできたものである。

この「いつでもできる どこでもできる ○○の子」を中学校区教育推進の柱として取り組んだのである。また、地域と一体となった取組となるよう、公民館の協力を得て地区民への周知にも努めた。

5) 卒業式

平成 12・13 年度とたて続けに 2 年間、校長の代理で卒業証書を渡してきた。その時から、卒業式の進め方に違和感を抱いていた。それは「在校生送辞、卒業生答辞」の場面である。「在校生送辞」は、在校生代表がステージ前の演台に立ち、卒業生に正対して送る言葉を述べる。

問題は、「卒業生答辞」なのだ。卒業生代表が演台に立ち、ステージの上から見降ろす校長に向かって答辞を述べる場面である。答辞は「校長に向かって述べる言葉」ではなく、在校生への言葉がメインで、保護者や地域の方々、先生方、教室や机・椅子そして校舎であり取り巻く全てに対する言葉であろう。

また、式の最後を飾る「全員合唱」は、学び舎で共に学び、磨き合い成長してきた仲間との最後の瞬間を合唱で結び、旅立ちを祝福するのである。卒業生の背中を見ながらの祝福でいいのだろうか...? 卒業生と在校生が正対して最後の時間を刻むべきではないだろうか。

という私の願いを先生方が叶えてくれたのである。簡単には承認されなかったが、実際にやってみて納得と賛同を得ることができた。

6) 修学旅行の実施学年及び実施時期

修学旅行といえば、3 年生が 5 月の下旬から 6 月にかけて関東方面へという学校がほとんどである。このパターンは、私の新採用の頃からほとんど変わっていない。ただし、日程は 3 泊 4 日から 2 泊 3 日の日程になった。取り巻く状況は大きく変わったにもかかわらず同じパターンを繰り返している。4 月最後の週末からゴールデンウィークにかけて、中体連の春季大会、5 月中旬には県の大会、6 月中旬には連合音楽会、その間に中間テスト、この隙間を縫っての修学旅行である。一方で、修学旅行も、見学主体の旅行からグループでの体験学習へと様変わりしてきた。グループ毎に

行き先や学習内容、交通機関の利用、体験先のアポイントなどをしなければならないので事前学習にたっぷり時間が必要になる。

学校行事や校外行事の時期と修学旅行の内容から実施時期を考えると、事前学習に十分時間をかけることができ時間的にも精神的にもゆとりのある第2学年の秋または3月上旬が適しているといえよう。初めて2年生で実施した修学旅行は10月下旬だった。(なお、校長として2校目のS中学校では3月上旬に実施)

7) 生徒の日常や校外での活動を写真で再現

連合音楽会、各種コンクールや大会など、校外で活躍する生徒のパフォーマンスを写真で紹介し、全校で仲間の一生懸命を共有しようとするものである。紹介された生徒達は仲間から、先生方からの賞賛や励ましを次への意欲やパワーに変え更に活躍するだろうし、写真を目の当たりにした生徒達は仲間の活躍を誇りに思うと同時にパワーをもらい自らの飛躍につなげてくれることを期待したのである。

また、日常生活に見られる特徴的な生徒の姿も積極的に紹介した。自分たちの日常を見た生徒が自身の行動や振る舞いを振り返り自らを律することに繋げてほしかったのである。

こういった実践が切り口となって、生徒や先生方に変化が生まれる(成長する)ことを期待したのである。

8) 危機管理

平成18年3月、「校誌の回収・再発行」事件がおきた。校長である私のチェックの甘さが招いた事件である。卒業学年の学級紹介の中にあった不適切な表現を担任も、学年主任も、校誌の担当者も、教頭も、自分もチェックできず、保護者からの通報でわかったのである。すでに校誌は、保護者や地域の方々(卒業式参列者)に配布されてしまっていた。即刻回収を始め、その日のうちに完了、後日再発行したのである。

学校でも、さまざまな問題や事件が起きる。教員の行き過ぎた生徒指導や交通事故などは迅速かつ適切な対応がもとめられる。初期対応の如何でその後の成り行きが左右されるのである。

校誌の回収などの場合、まずはPTA会長に、つぎに卒業式参列者に事実と対応策を示し不手際を謝罪した。職員の交通事故の場合は、その日のうちに被害者と勤務先の上司を訪ね、現状を把握(病状、怪我の状況など)するとともに謝罪をする。生徒指導上の問題

の場合も、該当する職員と一緒に謝罪に伺い、以後の対応などを伝え理解を得よう努めてきた。

危機管理は未然防止が最善の策であるが、起きてしまったときは、校長が先頭に立って解決にあたるのが鉄則である。

以上のようなM中学校での2年間の取組が次の職場である福井市S中学校の学校づくりの土台になったのである。

(3) 教育改革を先取りした中学校づくり(平成18年度～20年度)

平成18年3月22日、丹生郡清水町(現福井市)と境界を接する福井市S中学校への異動内示を受けた。学校づくりの土台を築き、新年度からの学校経営の青写真も書き上げ、これからといった矢先での異動であった。「校長が変わると学校が変わる」と言われるが、2年ではいかんともしがたいのだ。私の経験からすると、「校長が変わると学校が変わる」を実現するには、校長は最低4年でできれば5年の期間がほしい。本県の場合、2～3年、時として1年というケースもある。今こそ学校が変わらなければならないと言われているときにもかかわらず、こういった校長人事がいまだに続いていることに大いに疑問を感じている。学校改革のはじめの一步は校長人事であると言っても過言ではないというのが私の持論である。

残念ながら異動の対象になってしまったのである。

異動先の福井市S中学校は、全国で初めてとなる「異学年型教科センター方式」の学校として2年後に移転開校する学校であった。誰もが経験したことのない学校づくりなのである。前例のない学校を創らなければならないのである。我々には不安もあったが、それ以上に「異学年型教科センター方式」の学校創りは中学校教育の未来を切り開くものであるというワクワク感を持って全職員が一つになって取り組んだ。

教科センター、異学年クラスター、地域連携を学校改革の中核に据え、知識基盤社会で求められる学力と資質を培う「学び舎」づくりであった。その詳細については、これまでの研究集会要項や実践記録、「建築が学校を変える」(鹿島出版会)などで確かめていただきたい。

知識基盤社会の中で生きていく子どもたちのために今こそ学校は変わらなければならないのである。学校が変わるには教員が変わらなければならないのである。

教員の意識改革こそが、今、校長が取り組まなければならない喫緊の課題なのである。

校長先生方の取組に大いに期待したい。

おわりに

私は教員になろうと思って大学に入ったわけではなかった。貧しい兼業農家に育った私は、冬期間を除くほとんど毎日繰り広げられる田圃や畑、山の作業から抜け出すために大学（県外）をめざした。理系は苦手だったので文系で入ることができる県外の大学というのが受験校選択の基準だった。親の負担も考えず、不純きわまりない動機であった。

とにかく田舎を出たかったのである。春休みは雪の重みで傾いた杉の木を真っ直ぐに立たせる「杉の木起こし」、4月下旬の「畦塗り」、ゴールデンウィークの「田植え」、夏休み中は杉の木の生育を助ける「下草刈り」と風呂の湯沸かしや冬の暖房（薪ストーブ）用の「薪づくり」、さらに「稲刈り、ハサ掛け、脱穀、籾摺り」といったお米の収穫作業である。そして、夏に作った薪を山から運び出し薪小屋に積み上げ冬支度をするのである。その間に、年2回、夏・秋野菜づくりのためにスコップで一踏み一踏み掘り返しての畑作り作業がある。また、農作業や杉の木起こし用の縄づくり、雪囲い用の竹編みづくりなども欠かせない仕事だった。畑の「草むしり」は年間を通してしなければならなかった。こういった一連の作業から逃げたかったのである。とはいっても、農家の長男坊という意識があったのか春休み、ゴールデンウィーク、夏休み、試験休み、収穫期の日曜には手伝いに帰省していた。

ところで、私はいつ頃から教員になろうと思っていたのだろうか。4回生になり教育実習が始まろうとしている頃、周りで教員採用試験のことが話題になり始め、何となく自分もと、地元福井の受験手続きをしていたのである。福井県は4年前に国体を開催していた。天皇杯獲得に向けた競技力向上の一環として体育教員を大量に採用していた。2～3年先輩で体育教師をめざしていた人たちは県外で就職する状況が続いていた。そんな中での受験だったのでほとんど諦めていたが、幸いにも条件付き（小学校普通免許取得）ではあったが採用されたので教員になってしまったのである。田舎の長男で家に帰らなければという思いはいつも自分の中にあったこと、教育学部に進んだので教員ということを少しは意識していたこと、福井で教員は安定し

た職業であるということなどが、いつの間にか教員へと向わせていたのかもしれない。

こんな具合に始まった教員生活だったが、60歳の定年まで37年間勤めてしまった。

本稿が、これから教員人生を歩もうとしている人、ミドルリーダーとして学校運営を意識し始めている人、管理職をめざそうとしている人、そんな人たちの参考になれば幸いである。

ところで、はじめに述べた「ある時期」「いつから」の問題であるが、このことについては読み手のみなさんにお任せしたい。そして、あなたなりのその答えを、そっと耳打ちしていただけると嬉しい限りである。その日を心待ちにしながら終わりとしたい。

[参考文献]

しみん教育研究会（2009）『建築が教育を変える』
鹿島出版会
美山町教育研究会（1981）『あゆみ』美山町教育研究会